

私の生涯に沿うて

アリス・E・グイン



にはありませんでした。しかも唯一の輸送機関は荷馬車でした。生活に関しても、書物以外には教養を高めるものがなかったのです。そこで私の家族は、数年後、子供たちの教育のために、もう少し開けた町へ移り住むことにしましたが、そこもお田舎でした。

このようにして幼年時代を過ぎた私が、いま自分の生まれたところから数千マイルへ離れた国に来て、一千年以上にさかのぼる文化を持った大都市に住み、学生の満ちあふれている学校で教えています。しかも私は大へんに居心地良く感じているのですが、これは一体どうしてなのでしょう。

日本へ来る前に私はインドの詩人タゴールによって書かれた詩の一つを読んだことがありました。その詩は当時の私にはあまり印象的ではなかったのですが、日本で数カ年を過ごした後（二つの異なった日本の家庭での六ヵ月あるいは八ヵ月を含めて）再び読み返した時、その詩がまるで私自身のために書かれたものであるように感じました。その詩は次のように神に対する黙想と祈りの形式で書かれています。

1

人生の思いがけないことや予期しない出来事について回顧する時、なぜかほほえましく思うことがあります。私自身が今までたどってきた人生行路を思いめぐらす時、私は幾度か独りほほえむのであります。

私の両親は開拓者でありました。私は約七十年前ネブラスカ州の平原にある小さな家に生まれました。近くに医者がいなかったので、

私の出生に当たっては医者の付添いもありませんでした。私の家から見えるものはただ一軒の家だけで木もほとんど見えないところでした。一マイルばかり先にただ一つ教室のある校舎があり、そこでは一人の先生が八つの異なった学級にわたる十二人ないし十五人の生徒を教えていました。最も近い町（実は村なのですが開拓者特有の気持ちで町と呼んでいました）でも十四マイル離れており、私の家族の者が必要品の調達に行くのはこの町以外

あなたは知らざりし人を友とならしめ
わが家ならざる所に座を与え
遠きものを近くし、未知の人をも
兄弟とならしめ給いました。

さりながらこの住みなれし宿を
立ち去る時

私のこころは不安です。

新しいものの中にも古いものがあり
あなたもそこに居給つことを忘れが
ちです。

生れる時も死ぬ時も、この世でもあ
の世でも

あなたが導き給ういづこにても
喜びの絆もて、未知のものを

私の心につなぎとめるもの
それはとこしえに変わらぬあなたです。
私の生命の唯一の友なるあなたです。

あなたを知る時、国のへだては消えうせ
開かぬ扉はなくなるのです。

新しいものの中にも多くの古いものがあれ

ばこそ私は今ここで居心地良く感じている
です。しかしそこには差異もまたあります。
それらの差異のあるものは生活に魅力を増し
加えますが、疑問を起こさせるものもあって、
従来、私が当然のことだと思つていた事柄の
再検討を余儀なくされたこともありました。
このように人生は刺激に富んだ経験に満ちて
います。

2

中学校の生徒に英語の授業で「比較」につ
いて教えますと、毎年誰かが必ず「あなたは
アメリカと日本とどちらが好きですか」と尋
ねます。私は「両方とも好きです」と答え、
私がそう答えるのはその質問をよい加減に取
扱つていてのではないという説明をつけ加え
ます。これら二つの国を同じように好きであ
るのは、花に対する私の好みと同様です。私
はある花が好きだからといって他の花を嫌っ
ているわけではありません。それぞれの異なっ
た美しさのために両方とも好きなのです。私
は薄桃色の桜の花も好きであれば、燃えるよ
うな色をした秋の花もまた好きです。そして
すべての花が、皆同じであることを望みませ

ん。アメリカと日本に関する私の感じはちよ
うどこれと同じです。

アメリカは私の祖先の国、母国語を与えて
くれた国、キリスト教の信仰によって私をは
ぐくんでくれた国です。その歴史と文学は日
本のそれら以上に私のものとなっています。
それは私が最も感受性の強い年代にアメリカ
の歴史と文学に没頭したからでもありましょ
うし、また日本語のむずかしさのためでもあ
るでしょう。

しかし日本は私が成人してからの大部分を
過して来た国です。日本は私に美を与え、友
を与えてくれました。また自国とは異なる文
化的背景を持った人々に対する尊敬の念を与
えてくれました。私がやり甲斐のある仕事を
見出したのもここです。そうです、その仕
事が時には英語の文型の果てしない繰り返し
のように思えたことがあつたとしても、私は
今、それが無駄な骨折でなかつたということ
ができます。私の仕事を意義あらしめてくれ
るものは私が常に教えることを楽しんでい
る生徒たちの「ものわかりの良さ」です。もと
よりすべての生徒が等しく英語に興味を持っ
ているわけでもなく、彼らのすべてが大いに

英語を用いるであろうということも期待できません。しかし、将来、実業界、通商関係その他のいろいろな交際面において語学の勉強を真に必要とする人たちに一つの道具としての基礎英語を教える手助けをしたと思うので満足です。

私がたびたび尋ねられるもう一つの質問は「あなたはなぜ日本に来ましたか」です。これに対して時にはごく簡単に「同志社が英語の先生を求めていました。そして私は日本に来ることに関心があつたからです」と答えましたが、それでは十分な理由を言い表わしていません。私はただ英語を教えるために日本へ来たのではなく、私のキリスト教徒としての信仰を分つために日本へ参りました。それから私にとって人生に意義を与えるものであるからです。誰でも自分が何かに感動した時、その経験を他の人に分ちたいと望むのは当然です。「まああの日没をご覧なさい」とか「高雄の紅葉をあなたに見せたいものです」とか「あなたはこれこれの本を読んだことがありますか」等と私たちはどんなにしばしば言うことでしょうか。私にとって人生を意義あらしめているものは、キリストが啓示された神へ

の信仰なのですから、私はチャペルにおいても、バイブルクラスにおいても、また話している相手の人が話題をそうした方面に転ずる場合には、会話においてもその信仰を分かとうと努めて来しました。

神とキリスト教徒の生活に関する私の信念は、年を経るうちに幾らか変りましたが、神に対する根本的な信仰は少しも変わらず、知的な疑問や学生の熱心な質問や、人生の困難な経験に直面しなければならなかったために、それはむしろ深められたと思います。私の考えは倫理の強調（イエスの教を律法として従おうとする一種の機械的なやり方）から、人が神の愛のうちに生活の根をおろすことに成功しさえすればその靈魂は成長し、他の人々と正しい関係を保つ源を得るであろうという考えに変わりました。これはすなわち律法の強調でなくして、生々とした精神的なものの強調であります。

3

私の教育哲学は生命をはぐくみ発達させようとしてゐることです。すなわち一方におい

て妨げとなるものを抑えつつ、さらに完全な発達をもたらすものを育成しようとする努力することです。「人間を造る」という日本語を耳にする時、私は「造る」という言葉が生命をはぐくみ育てる意味なのか、それとも形成する、組立てるという意味に用いられているのか考えさせられることがあります。この二つ間には大きな見解の相違があるからです。

人の生命を育てるためには精神的物質的両面の力と援助が必要です。したがって宗教、科学ともに必要なのです。この二つの力は電気の両極のようなものでそれぞれ単独では完全でないが、二つが相互に作用する時、大きな力を生ずるものであると考えらるべき時が来ていると思います。また同志社においてこれこれらの関係についてさらに深い理解と発展が得られるよう希望するものであります。同志社は移り変わる社会の流れの中にあつて果すべき多くの使命を今なお持つてしていると信じます。

人生の困難にくじけそうになる時、私が好んで読むもう一つの詩があります。それはこの世のすべての混乱のただ中にも創造主なる神が働いておられるという信仰を言い表わし

たものです。

しばし世のわずらいから脱げ出なさい
男、女、平和を愛する人々よ、
騒ぎ、不信、憎悪に胸かきむしられ
日々の新聞の見出しに心うばわれて
あなた方は皆、憑かれているのだ。

あなたの生命の源にたち帰りなさい、
孤独の子供よ、悲しめる者よ、
夜は太古さながら
黙せる星を抱いて静まりかえっている
されど光に溢れた昼が続くのだ。

耳をかたむけ、心して聞けよ、
憎悪より強く、恐れより強い流れを、
死より遙かに強い流れを、
それが絶対者の流れなのだ。
整然として止むことなき永遠の流れ
耳をかたむけて聞けよ、
男、女、平和を愛する人々よ。

私の未来はどうなるでしょうか。ずっと前
のことですが、私は死ぬばかりのことに直面

しなければなりません。そして死を人
生のさまざまな旋律の中の恐ろしい部分とし
てではなく、自然なものとして受けることが
できるのは、死に直面して始めて可能だと知
りました。また、ひとたびこれを経験するこ
とによって心の平安が得られ、思い煩らうこ
となく日々を過し得るものであることを知り
ました。死は今までと違った形式の人生に通
じる入口にはかならないという私の信仰の故
に、死を自然のものとして受けとることが比
較的容易でありました。

このような信仰を持ち続けることは困難だ
と私が思ったことがあったでしょうか。やは
り時にはありました。しかし数百万年間続い
た進化の過程がやっと人間という人物を産み
出したのに、それがろうそくの燭のように人
の心をゆらゆらさせると考えることの方がは
るかに難しいと思います。私たちが進化の過
程について語るのは、結局、神の創造力がど
のようにして働き続けているかを語ることに
なると信じます。

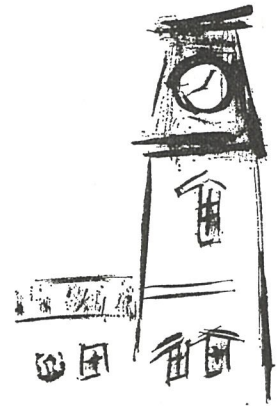
永遠の生命に関する信仰は、あらゆる年代
あらゆる民族の間にも見られますが、それを
私たちの肉体の空腹になぞらえてみることは

できないものでしょうか。もし肉体に満足を
与える食物が実際に存在しないということに
なれば、肉体的渴望というものはあり得ない
のではないのでしょうか。それゆえ、人が永遠
の生命を渴望するのは、それに満足を与える
ところのものがあればこそだと考えるのは不
合理だとは思われません。

来る三月に私は実際の教室の授業から隠退
するつもりですが、まだまだ生きる目的が多
くあることを感じています。そして退職後も
こんなに長い間親しくして来た国において生
活を続け得ることを大へんしあわせに思いま
す。しかし、これは決して私の心が自分の生
まれた国から離れたというのではありませ
ん。私たちがすべての人類の父なる神に対す
る信仰を持つ時「国のへだては消え失せる」
からです。「私たちは一つである」という信
仰の背後にあるものを有難く思うとともに、
「私たちは一つである」というこの思いを、
さらに深めてくれたこの国における多くの経
験を非常にうれしく思っています。

(平岡訳)
(中学校教諭・英語)

同志社の思想家たち



和田洋一

1

「本来、言論の仕事は何らかの意味で天下に志ある者がやるという性格のものでした。歴史的にいつてそうです。ところが放送の仕事は、どうも志なくして行なわれたという傾向があります。」

今から三年ほど前、戒能通孝氏は放送関係の人たちを前にして、そんな風に話を切りだした。NHKにしたって何となくできたので、何となくやっているうちに金が入ってきた。民放、これも何となくできた。現在何をやっているかといえば主としてキャバレー経

営的な仕事をやっている。商品です、みんな……という風に戒能氏は話をつづけた。放送事業に志が欠けていること、しよっぱなから欠けていたことに物足りなさや軽蔑とを感じて、戒能氏はすげすげ言ったのであるが、話をきいている側は、どういう風に受けとったであろうか。

戒能氏は言うまでもなく明治生れの知識人である。しかしきいているNHKや民放の人たちは戦中派や戦後派ばかりだったので、突然々志々などといわれて、もひとつピンとこなかったのではないか。志というのは、やはり明治の言葉であって、大正時代ないし大正

2

デモクラシーの時代から、しだいにはやらなくなってきたように思われる。戒能氏自身は、明治の言論界に活躍した人たち、福沢諭吉だとか、内村鑑三だとか徳富蘇峯だとか、陸羯南だとか、そういうたぐいの人を一方で思い浮べながら話をしていたのであろう。昭和とともに始まった日本の放送事業は、確かに天下に志ある者によって行なわれたのではなかった。

今から九十年前、新島襄のはげしい志が山本覚馬の志と結びついて、新しい教育の仕事が始められた。同志社と名づけられたその学校に私の父は教師として奉職し、長男の私は大正五年の四月、同志社中学に入学した。入学の半年ほど前に、府立一中へはいりたいという父は、官立の中学などつまらん、同志社へいけとさっぱりいった。父は東京帝国大学の出身であったにもかかわらず、そして同志社の待遇が悪いことを家庭でこぼしていたにもかかわらず、同志社をやはり、いい学校だと思っていたようである。

同志社中学へはいつてまる三年間、私は立

志館という名前の建物の中で授業をうけた。木造の平家で、今もう姿を消してしまっ
て、そのあとに体育館がたっている。志を立
てるというその建物の名前に私は感銘をうけ
なかったし、チャペルや教室で新島先生の志
について、あるいはまた同志社という名称の
由来についてきかされても、中学生の私は一
向に感動しなかったようである。

雄弁大会がチャペルで開かれたときには、
上級生が新島精神だとか同志社スピリットだ
とかをさかんに口にした。あるとき一人の生
徒が感動的な、いくらかうわずつたような調
子で「ぼくが同志社に入学したとき、まっさ
きにぼくの心を強くこらえたのは、あの新島
先生の写真、新島先生のおのひとみであっ
た」ときげんだ。すると聴衆の中から「ホン
トケー？」というひやかしの言葉が出た。そ
の声は大きくはなかったが、聴衆全体の耳に
とどいたらしく、つぎのしゅんかんには、ど
つと笑い声がおこった。新島精神とは一体何
か、分っているのか分っていないのか、とも
かくも新島精神をふりまわす連中、いわゆる
精神主義者と、「ホントケー」というあまり
上品でない京言葉によって代表されるひやか

し半分の批判者、私自身は
その中間に立っていたが、
どちらかというと後者に近
かったかもしれない。つま
り精神だとか使命感だとか
志の過剰に、中学生の私は
なやまされていたのであ
る。「また新島か」「また同
志社精神か」と思いなが
ら、よこを向いてしまつた
とがしばしばだったのであ
る。それくらい半世紀近く、
私のキリスト教的信仰は強
くなったりかすかになったりであるが、精神
主義者でないことでは終始一貫していたよう
に思う。ただ同志社創立九十周年を迎えるす
こし前ごろから、私は新島襄の志に改めて思
いをいたすようになり、同志社という学校の
独自性、個性が、かつては非常に明白であっ
たのが、じりじりと薄められていって、最近
はあるのかないのか分らなくなっている事態
にも改めて思いをいたすようになった。

3



昭和12年7月6日付の日出新聞

現在の同志社大学人文科学研究所内には
「戦時下におけるキリスト者ならびに自由主
義者の抵抗」を研究するグループがあり、私
はその中の一人として、日中戦争が始まる時
期の同志社の受難史、その抵抗と挫折をこの
二、三年くらいテーマとしている。当時の同志
社総長、さまざまなたごたごたの中心に立っ
ていた湯浅八郎氏については、今日手きびしい
批判をする人も同志社内にはないではない。ご
たごたが次から次へとおこつた昭和十年、十
一年、十二年当時はもちろん同志社教職員の



湯浅八郎氏

あいだで、湯浅総長の評判は決していいとはいえなかった。すでに日本の国策、その方針は決定しており、強力に押し進められているのであるから、同志社もキリスト教主義を国策にあわせて適当にやっつけていかねばならないのに、湯浅総長は配属将校をおこらせたり、右翼団体をしげきしたり、日本精神の立場に立つ教授のクビを切ったりして、問題ばかりおこしている、こんなことでは同志社はつぶされてしまう、早く湯浅総長は同志社から去っていったほうがいいと考えている人、そういう事なかれ主義の人が教職員の中には可成り沢山いた。

また湯浅総長自身が事なかれ主義ではなく、同志社の伝統を守るために、ゆずること

のでできない一線を守るためにたたかう姿勢をとっていることに対して、一方で不安を感じながら他方で支持をおくり、同志社がよいよつぶされた場合の身の振り方まで本気で考えている人もあった。しかし湯浅総長は最初はたたかう身構えをし、つきには相手が強すぎてどうにもならないことが分ると、腰がくだけるといふことが一度ならずあり、せつかく悲壮な決意で総長を支持しようとする人びとを失望させるということもあった。

そこから批評することはやさしい。しかし日中戦争が始まろうとするあの時期に、仏教徒もキリスト教徒も国策に迎合し、おっかな

びつくり、ひたすら無難を願っていた中に、同志社総長だけはすくなくとも事なかれ主義ではないことを、当時大学予科の教授であつた私は誇りにしていたし、今も誇りにしている。総長というような重要な地位にいると、

どうしても無事平穩を願うことになり、若い教授助教授がラディカルな行爲に出るのをおそれ、上から抑えるというのが普通である。

しかし湯浅総長の場合は、総長自身が教職員一同をハラハラさせながら、時流に乗つた右翼団体、あるいは軍部とたたかう身構えを示

したのだから、これはやはり珍らしいケースだったといわねばならない。もちろん軍部や国家権力を相手に堂々と一戦をまじえることのできる時勢ではなかつたし、湯浅総長の抵抗の姿勢はすぐくずれてしまう結果になり、第三者からみれば見苦しい敗北であつたかも知らない。しかし新島襄の創立した同志社をかがえのめないものと感じ、その個性を守り抜くためにたたかつた湯浅総長の姿は歴史にのこさねばならないし、当時の日本のキリスト教界全体に抵抗らしいものがほとんどなにもなかつただけに、一層書きのこす必要があると私は考えていた。

4

たまたま同志社消費生活協同組合の理事長西村豁通君から話があり、創立九十周年を記念して協同組合から何か有益な本を出版をしたいが考えてみてくれないか、同志社の生んだ思想家を扱つたような書物はどうだろうか、ということであつた。もうけなくてもいい、損をしてもかまわない、同志社の学生たちにはいい読物を提供できたなら、そしてさらに、同志社の校友同窓、同志社以外の人たち

にも喜んでもらえるような書物が出せたらという話で、私もその気になり、同じ研究室の鶴見俊輔さんに相談してみた。鶴見さんは二年ほど前から新島襄について一冊の本を書く気になっていて、ばちばち資料を集めていたからである。

鶴見さんは執筆者の一人として、新島襄を担当することを約束してくれた。新島襄なきあとの時代を代表する人物を神学部のことなかにお願いしようと思つて、竹中正夫さんを訪ねたところ、神学部長を引きうけさせられてしまったので執筆はとて無理だということとで断念し、『内村鑑三』執筆後引きつづき日本キリスト教思想史の研究に意慾をもやしておられる土肥昭夫さんにお願ひして海老名弾正を引きうけて頂くこととなった。宗教部の笠原芳光さんは、キリスト者であると同時に社会学的実践家である留岡幸助や山室軍平を扱つてもらうつもりでいたが、笠原さんの関心は柏木義円に集中することになり、なかば埋もれたこの反戦の使徒を発掘することの意味を私も強く感じ、留岡幸助や山室軍平の放棄に同意した。最初は同志社の生んだ重要な思想家を十数名にしぼり、全部扱うつもりで

いたが、それが無理なことが分つてきて、同志社の思想家たちの幾人かを扱うことで満足し、のこされた重要な人びつについては、続篇に望みをかけることになった。

法学部の岡本清一さんには安部磯雄と山川均をお願いすることになった。同志社の思想家たちというとき、徳富兄弟、湯浅治郎、小崎弘道、宮川経輝、浮田和民らの名前がすぐ頭に浮び、その中でも特に徳富蘇峯を取りあげることでできなかったのは残念であつたが、一方、同志社女学校というものの特色、新島襄が同志社を創立した当初から女子教育に留意していた点を高く評価し、この書物の中に何らかの形で生かしたいと思ひ、その結果は女子大出身の魚木アサさんと横山貞子さんがミス・デントンと周再賜について執筆して下さることになった。

執筆予定者は月一回研究会をもち、意見の交換をしてきたが、私たちは自分たちの取りあげた人物の一人一人が、同志社でなければ生みだせない、特殊なカラーをもつた人たちであることを今さらのように認め、同志社という学校の特異性を改めて認めあつた次第である。

始めに放送界のことにふれたが、今日の教育界を見ても、大学志望者の激増する中で、二年制、四年制の大学が次から次へとあつぱくつくられていく。わが同志社も時の流れにおし流されているとばかりは言えないにしても、創立者のはげしい志が薄められてきていることだけは、おおいにかくすることができない。九十周年という時期に、改めて創立者の鮮明強烈な使命感を思い、その弟子たち——直弟子の子である湯浅八郎とアメリカからきて文字通り女学校のために献身したミス・フロレンス・デントンをも含めて——の強い個性、その思想、思想のたたかひをふりかえることは意味深いことであるし、私たちの『同志社の思想家たち』がそのために役立つことができれば、と考えている。

さいごに、同志社女子中・高で美術の指導をしておられる鈴木泰正先生に、私はこれまで一度もごあいさつをしたことはなく、ただひそかに尊敬をよせているだけであつたが、その鈴木先生が私たちの書物の装いで引きうけて下さつたことは大変うれしいことであつた。